

利他性研究の意味——特集にあたって

道徳科学研究センター長 大野 正英

道徳科学研究センターでは三年間にわたり、「利他性を考える」を共通テーマとして、各研究員がそれぞれの専門分野から、利他性の問題に取り組んできました。「利他性」を一言で言えば、「自己の不利益をかえりみず、他者の利益のために行動すること」となります。人間は、一般的に自分の利害得失を第一に考えて行動することが多いのですが、現実には他人や集団のために、自発的に金銭的負担を引き受けたり、労力を無償で提供したりという行動も多く見られます。贈与や寄付、またボランティア活動などがそれにあたりますし、時には自らの生命の危険をかえりみず、他者を救うという行動に出る場合さえあります。こうした利他性は、究極的にはキリストの説いた愛や仏陀の慈悲、孔子の仁といった教えにつながるもので、道徳の中核的要素に位置づけられます。

今回研究センターのテーマとして、利他性を取り上げたことには大きく二つの理由があります。第一には、脳科学や進化生物学、道徳心理学などのさまざまな学問分野で、利他性が科学的研究の対象とされ、急速に研究が進んでいることにあります。人間の脳においてどのようなメカニズムで利他性が発揮されるのか、どのような過程を経て利他性が人間社会に定着してきたのかといった問題に対して、科学的な解明が進められています。第二には、現実社会における利他的な行動に対する関心が高まりつつあることが挙げられます。平成七年の阪神淡路大震災を契機にして広がり始めたボランティア意識の高まりは、この二〇年余りの間に急速に広がり、多くの人々の間に定着してきています。また、利益至上主義や個人主義的指向の行き過ぎに対する反省から、人々の間のつながりの回復を求める声も

大きくなってきています。利他的な行動は、健全な社会関係の構築につながるとともに、その当事者にとっても大きな喜びと生きる意味を生み出す働きがあります。

ただし、利他的行動を無条件に肯定できるとは限りません。一見利他的に見える行動が、実際には利己的な動機に基づいている場合があります。また、相手のためにと思っている行動が、実際にはその相手に対してあまり意味がないばかりか、害悪をもたらすものとなってしまう場合もしばしば起こりえます。研究センターにおいても、「利」とは何か、「他」とは何を意味するのかをめぐって議論が起きました。

以上のような状況を踏まえた上で、各研究員からそれぞれの専門領域からの利他性研究が報告され、議論が積み上げられました。今号では、それらの研究の一部を掲載しております。利他性は、社会の健全な発展のために必要不可欠な要素であり、それをいかに醸成していくかは、人類にとっての大きな課題です。今後の利他性研究のさらなる発展へとつなげていきたいと考えております。